

おれはドスヘラクレス

へらくれすりゆうぞう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ドスヘラクレス

【レア度】 4

【特徴】 世界一強いと言われている虫。装備の加工などに幅広く使われている。

く モンスターハンターダブルクロスより抜粋く

目次

おれは	1
世界一	6
強いと	10
言われている	16
虫だ。	21

おれは

おう、温暖期だぜ。

遺跡平原は、今日も心地良い風で靡いてるぜ。

おれはドスヘラクレス。

最強の虫だ。この地上に生けるありとあらゆる存在の上をいく、最強の存在だ。

ん？ 何故おれが最強かって？ たかが小さな虫じゃないかだつて？

ノンノン。俺の特徴をよく見てみてくれ。拾い上げたおれを、もつとじっくりと見てみてくれよ。

『世界一強いと言われている虫。装備の加工などに幅広く使われている』

装備の加工？ そりゃあまあ、ハンターたちはおれを躍起になって探すこともある。虫あみ片手に鬼の形相をした奴だって、何度も見たことはあるけどな。

でも、そこじゃない。後半部分じゃない。もつと前の方を見てくれ。

『世界一強いと言われている虫』

これだ。

見てみる、これ。これがおれの特徴だ。おれがおれたる所以。おれは世界一強い虫なんだ。

……え？ そうは見えないって？

馬鹿野郎。虫を見た目で判断するなって、お母ちゃんに教わっただろう？

確かに、おれは小柄な昆虫だ。だが、世界一強い虫であることには変わりない。体格なんざ、何の影響もないのさ。おれはおれ、最強で最高だ。

おつとつと。

なんだか丸っこいやつがやってきたぜ。

ごろごろと身を丸くしては転がって、モンスターの体に張り付く嫌な奴。気を抜いた瞬間に転がってくる、本当にクソみたいな小虫だぜ。

何て名前だったかな。ウンコ虫とか、そんな名前だったっけ。

「きゅおーっ！」

なんだこいつ。ウンコ虫じゃないって言ってるぜ。

なんだって？ ボクの名前はクンチュウだって？

けっ。隙については転がってきて、いざ攻撃しようとしたら即座に守備に入るような奴にやあ、クンチュウなんて名前はもったいない。ウンコ虫で十分だ。

「きゅっ、きゅっ！」

あん？ 何か知らんけど怒ってやがる。

なんだ、やるのか？ このおれと——この世界一強い虫と、戦おうっていうのか？

おれは渾身の殺気を放つ。

この目の前できゅーきゅーと鳴くクソ虫に向けて。一時的な感情に振り回され、おれとやり合おうとする命知らずなこいつに向けて、身も凍えるような殺気を送ってやった。

しかしこいつは、気付かない。どんな存在を相手にしてしまったのか、全く理解せずにぴーぴー鳴いてやがる。

仕方がない。相手してやるか。

おれはドスヘラクレス。

勇ましい二本角と、光沢を放つ鎧が特徴さ。

おれはドスヘラクレス。

甲殻に挟んだ翼は透き通るように綺麗だって評判さ。

おれはドスヘラクレス。

どんな相手も徹底的に叩き潰す、冷酷無比な存在さ。

ずがん、なんて。まるで、ハンターたちが使っているあの『たいほう』とかいう奴のような音が響いたぜ。

かと思えば、それは岩の崩れる音に成り変わる。赤褐色の遺跡の壁

が崩れ落ちて、岩の雪崩を引き起こしていった。その光景は、なかなか圧巻だったぜ。

何が起きたか。いや、おれが何をしたか。

それを視認出来た奴はいるかい？ いたとしたら、それはおれとタメを張れる強者だな。自慢していいぜ。

おれがしたこと。それは、あのクソダンゴを弾き飛ばした。それだけだ。

おれの自慢のこの角で、奴の体を挟み込む。丸まってその身を守る前に、さつさと挟んでしまうのがコツだ。

弾き飛ばされて、ようやくその身を玉のように丸くさせたクソ虫。けれど、遅い。お前が玉になるというのは、自ら砲丸になりに行ったようなもんだ。ぶつかつた岩をぶち壊す、強烈な砲丸にな。

あとは、あの光景通りだ。その威力のあまりに遺跡ごと崩れちゃって、目の前には廃墟しか残らない……ってな。

どうだ？ おれの凄さ、感じ取ってくれたかい？

おれは最強の虫。あんな小虫なんざには遅れはとらねえよ。

「……ぎちぎちぎち」

さて、飯を食うか！

なんて思いながら背中中の翼を展開しようと思つたんだが、またもや目の前に嫌な奴がやってきた。

ぶぶぶ、なんて音を立てながら、忙しなく羽ばたかれる薄い羽。

黄色の複眼を輝かせ、自らの眼下を睨むその形相。

緑色の甲殻に、おれより遥かに大きなその体躯。

この遺跡平原に住まう甲虫種、アルセルタスだ。

「ぎしゃーっ」

あの岩が崩れる音に誘われてきたんだらうか。だとしたら、相当好奇心が旺盛な奴か、それともただのバカだな。みんなはどう思う？

あいつのこと。

「ぎちっ、ぎちちちっ」

少し呆れたような素振りを見せると、奴は苛々した様子で歯を打ち

鳴らした。

なんだこいつ。こいつもなんか、キレてやがる。

「ぎっしゅーっ!!」

両手を大きく広げながら、奴は全力で怒号を上げた。懸命に自らを大きく見せながら、おれに敵意を剥き出しにしている。

この空はわしのもんじや、とでも言いたげに羽を鳴らして、おれの真上をとるその姿。その体躯もあつてか影も大きくて、あんなのに飛ばれてると何だか無性に気になってしまっぜ。おちおちと食事もできやしない。

全く、嫌な野郎だ。無視してやろうと思ったのに、そうはさせてくれないってか。

……はあ。

仕方ない。

もう少し体を動かして、飯のために腹を空かせてやろうじゃないか。

背中の甲殻をかつちりと閉め、はみ出た羽もそつと仕舞う。そうして、おれは自らの角をそつと掲げた。来い、と言わんばかりに、我が自慢の一振りを陽に照らす。

「きちちちちっ!!」

そんな安い挑発に乗ったかのように、アルセルタスは咆哮。

次いで、勢いよく飛び出した。

その猛烈な勢いは、周囲の塵が飛び上がるほど。それをもって、奴は自らの誇りを輝かせた。

頭部から生えた、鋸のような敵つい角。それを前へと突き出し、おれを串刺しにせんと風を鳴らした。

はっ。何だお前。お前も、自分の角を自慢する口か？

良い度胸だ。このドスヘラクレスの前で角自慢をするたあ、良い根性してやがる。

嫌いじゃないぜ？ 好きでもないけどな！

閃光、次いで衝撃波。

まるで、鉄が砕けるような音が響き渡る。

「きつ……しゅああつ……!?」

緑色の雨が降った。

おれの振り抜いた角の力に、淡い色をしたそれが大地を濡らしていく。

何が起きたか？ 単純だ。

おれに向けて滑空突進してきた奴を、ただ待ち受けて叩き落としただけだ。この自慢の角で、奴の誇りを砕いてやっただけだ。

どすん、なんて音を立てて、奴は地に落ちる。

全身の甲殻を粉状にして、絶命に苦しむかのようにその手足をバタバタさせながら。

ふっ、死に方も醜いな。死ぬ時は死ぬ時だと、もっと潔く受け入れられないものなんだろうか。

……まあ、いい。おれには関係ないことだ。あいつが足をピクピクさせたって、至極どうでもいいことだ。

これで分かっただろう？

俺は地上最強の虫。世界一強い、ドスヘラクレス。

おれにあまり近寄るな。

おれの心も、この自慢の角も。

ドキドキするほど、輝いてやがるぜ。

世界一

ああ、微妙な天気だ。

今日の原生林は、良い感じにジメジメとしている。湿っぽい天気か嫌いなおれには、何とも不快な一日になりそうだ。

今日のおれは、原生林へとやってきた。

知ってるかい？ 樹液つてのは、木の種類ごとに味が違うんだぜ。そりゃあもう、女の子の味が違うようにな。

ここには、遺跡平原にはない木がたくさん生えている。随分と背の高いものから、うねったような細長い奴まで。

背の高い奴は、すつきりとした甘さが特徴的だ。おやつ感覚で、ちゅーちゅーといけてしまうくらいに軽くて飲みやすい。反面、細長い奴は強烈に塩辛い。正直食べたもんじゃねえ。不思議なもんだ。

そして、面白いことにな。なんと、同じ木であつても生えてる場所によつて微妙に味が違う。遺跡平原とおなじ形をしてる癖に、この物の方が深い旨みがある、なんてことはよくあるんだ。育ちの違いって感じかねえ？

……おっと、すまねえな。ついつい語っちゃまったぜ。何分、木のことになると抑えが効かなくてよ。

さてさて。おれが今日、この原生林に足を運んだのは……他でもない、ここの太い樹液を飲みたくなったからだ。

ん？ その木がなんて名前かつて？ 生憎、おれはそういうことに興味はない。いちいちモノに記号をつけるのは、人間たちがやることだ。

おれはドスヘラクレス。名前なんて、どうでもいい。大事なことは、この木が旨いかだ。

がしつと、全身でくつついてみれば、逞しい幹の感触が伝わってきた。

木の皮の下で、みずみずしい樹液が胎動しているような、そんな力強い感触だ。ほんのり温かくて、状態も良好。よし、今日はこの木に

するか！

ちゆう、ちゆう。

我ながらおれには似合わない、可愛らしい音で吸っちゃったぜ。でも、そんなことに構っていられない。口の中いっぱい広がる、この木のフレーバー！ サラサラと入ってくるというのに、口にとろけた時にはすでに旨みの塊！ ぱちぱちと弾ける樹液の酸味に、この水源溢れる原生林の旨みを濃縮した爽快感！

たまらねえ味わいだ。やっぱりここは、いい木が揃ってるぜ。

ドスヘラクレス。

おれは世界一強いと言われている虫。

そんなおれの、主な食事はこれだ。

樹液だ。

あん？ なんだって？

世界一強い癖に、樹液なんか食ってるのか、だって？

確かに、他の奴から見たら少し物足りないかもしれないねえなあ。けどな、あの砂漠の暴君ディアブロスだって、サボテン食って生きてるんだぜ？ あいつら、悪魔みたいな顔してる癖に、サボテンをうまいうまいってポリポリ食ってるんだぜ？ それでも、あれほどの馬力を生み出してるんだ、奴は。

つまりそこから分かることは、強い奴は燃費がいいってことだ。俺くらいになるとな、樹液くらいで十分なのよ。

サボテンも樹液も、どっちも植物由来。変に肉を食わずとも、木からエネルギーをもらって世界に還す。これが、世界一強いと言われるドスヘラクレス流のやり方だ。おれちゃんの流儀ってな。

「……かちっ、かちちち……」

満腹満腹。ああ、年甲斐もなくつついっつい食い過ぎてしまった。

もう腹がパンパンだ。あの鮫野郎になったような気分だ。

「かかっ、かかか……っ」

でもまあ、これを食べうためにわざわざ原生林まで飛んできたんだ。満足いくまで喰わなきゃ損つてもんだよな。

「かつかつか……」

さあ、飛んで帰ろう。

そう思ったのに、足が変なもんに引つ掛かった。

何だこれ？ 白い、糸？ なんか、もちやもちやとくつついてくる、糸のような何かだ。

「かかかか……っ！」

なんだいさつきからうるせえな。

誰かが、おれの上でかちかちと何かを鳴らしてやがる。

一体誰だ、なんて思つて上を見上げたら。

一匹の、大きな毒蜘蛛が。

「きゅあーっ!!」

鋭い鋏角を見せつけながら、そいつは吠えた。

おいらはネルスキュラ！ ここに迷い込んだが運の尽き！ おいらの作り上げたこの粘着蜘蛛の巣の前では手も足も出ないだろう！

さあ、今からお前を食つてやるぞ！ ……と。

なんだい、ここはまさかアンタの巣かい？ どうりで踏み心地のいいマットだと思つた。ねちよねちよしてるけど。

「きゅっ、きゅっ……」

吠えたと思つたら、奴はせつせと歩き出してはおれの真上を陣取つてくる。

なんだこいつ、本当におれを喰うつもりか。

おれを？

この世界一強いと言われている、ドスヘラクレス様を？

はっ。笑わせてくれるじゃねえか。

「きゅーっ!!」

奴、ネルスキュラは、器用に壁を伝い、そこから毒を垂れ流してきた。それはまっすぐ、この蜘蛛の巣に絡まれたおれへと降り注ぐ。

こいつのこと、おれ知ってるぜ。毒液とか催眠液とか、なんかいやらしいことしてくる奴だろ？ おいらに近付くと火傷するぜっていつも言ってる、痛い奴だろ？

全く、めんどくさいぜ。でもまあ、売られた喧嘩は買う主義だ。

「おらっ、こいつを喰らいやがれ！」

「きゅおっ!？」

おれの足に絡まる糸を、自慢の角で一刺しだ。

そうして、勢いよく頭を振り上げる。すると同時に角も振り上がって、絡まっていた糸も打ち上げられた。

奴の糸は、ここらの岩に接着されている。けれどその接着は頑丈で、ちよつとやそつとじゃ外れない。

だから、振り上がった糸に引つ張られるままに、岩も剥がれて宙に舞った。

「きゅっ……きゅあーっ!？」

振り上げられた糸に、毒液は全て弾き飛ばされて。

どころか弧を描くように、糸の波が牙を剥く。天井に張り付いた、自らの生みの親に向けて。

ばしんと、鋭い音が響き渡ったのと同時に。

どすんと、巨体が落ちてくる。

岩の欠片に串刺しになった、憐れな毒蜘蛛が落ちてくる。

「きゅ……きゅっ……」

……ふう。いい食後の運動になったぜ。

苦悶の声で、奴は懸命に喘いでいる。なんともそそられない、哀しい奴だ。

ぴくぴくと足を引くつかせながらも、立ち上がる感じじゃあなさそうだな。くたばるのも時間の問題か？

全く、喧嘩を売る相手を間違えるからだ。間違えるのは足の数だけで十分だろ？ 蜘蛛の癖に、六本足しやがって。蜘蛛は骸龍イカと同じで八本足だって、相場が決まってるじゃん。あれ、それは浮岳龍コだっけ？ まあどつちでもいいか。

おれは世界一強いと言われている虫。世界一、だ。

六本足如きには負けねえよ！

強いと

おう、夏だぜ。

いや、もう夏とかどうとか関係ないぜ。

熱すぎる。もう、暑いとかそんなレベルじゃない。

熱い。熱いだ。

ここは砂漠。

眩しい太陽が照り付けて、砂を激しく焼いていく。

流砂やサボテンにまみれた光景は、もう見るだけで心の芯まで暑くなってしまうぜ。

本当に、砂漠だ。

どこを見渡しても、広い広い砂漠が地面を覆っている。遠くの方の景色は揺らいでいて、まるで蜃気楼のような影が揺らいでいた。

……まずい。

今回はいくらなんでも、まずいかもしれない。

いくら世界一強いと言われているおれでも、こればかりには敵わない。

環境という、この世界の絶対的なルールには。

ああ。

もう……。

喉が、カラカラだ。

この暑さの前では、流石のおれも、枯れ果ててしまいそうだぜ。

おう暑いぜ？

おれは頑張るぜ？

燃える太陽光を浴びて？

角を振りかざすこの姿は、わくわくするほど決まってるぜってか？

馬鹿野郎。

そんな余裕があるもんかよ。

砂漠だぜ。砂漠で、めちやくちや喉が渴いてるんだぜ。

そんな、自分の姿に酔いしれてる余裕なんざあるかってんだ。

ああ、早く。早く、オアシスを……。

——なぜ、俺はこんなところにいるのか。

それはあの原生林での一件から、数日経った頃だった。

原生林に、大量にアイルーがやってきたのだ。

群れの移動なのか、それともただの狩りなのか。あいつらが何を考えているかは分かんなかったが、いずれにせよ俺は逃げるしかなかった。

もちろん、アイルーを倒せない、なんて理由ではない。

いや、むしろ倒せないで合ってるか。

おれは地上最強の虫だ。世界一強いと言われてる存在だ。

アイルーに後れを取る訳ではない。

ただ、おれにはあんな可愛いものは倒せねえ。

……もう一度言うぞ。

おれには、あんな可愛いもんは倒せねえんだ。

いくら強いといつても、ただ無差別にその力を振り回すのは蛮勇としか言いようがない。おれくらいになると、力の使い時をすっかり見極めるもんだ。

アイルーは、可愛い。

ふわふわで、もふもふで、声もとっても可愛らしくて。

おれには、あんな素敵な奴らに手……じゃねえ、角を上げるなんて、とてもじゃないができなかった。

相手にはできない。手を上げたくない。

故に、距離を置くしかない。

世界一強いと言われている虫が、この体たらくだ。情けないだろ？

笑ってもいいぜ。おれはあいつらを傷つけるくらいなら、笑われることを選ぶ。

……とまあ、そんなこんなでな。

気付いたら、おれはここにいた。何とかアイルーから離れようと羽を震わしていたら、この砂漠に着いていた。

砂漠は、大変だ。

何といつても、水がねえ。水がないから、木もほとんどねえ。おかげでおれは腹ペコだ。もう随分と長い間、何も飲まずに彷徨っている。

——だからこそ、だ。

長い時間を我慢して、ようやく入れたその一杯は。限りなく旨いもんなんだよな。

辿り着いた先。

砂漠の奥の奥の、華やかなオアシスの中。

そこに咲いた、力強い葉脈を躍動させる一本の木。

ぴたつとくつつけば、ひんやりとした冷たさがおれに襲い掛かってきた。

……キンキンに冷えてやがる……つ。

その有り難みに震えつつ、そつと一口。

つけた瞬間、一気に口の中を潤してくれるその樹液。

極上の感覚というものだろうか。

弾ける気泡のようなものが、喉の奥へと滑り込んでくる。

飲み応え抜群。喉越しが最高。

甘みと酸味と、程よい苦味。それらが混ざり合ったそのコクに、思わず涙が出そうだった。

原生林からこの砂漠まで、数日間の飲まず食わず。

そこに入り込む、この最高級の樹液……！

染み込んできやがる……体につ!!

「ぎぎっつ、ぎぎちぎぎ……」

まるで、萎んでくしゃくしゃになった枯葉の気分だ。

それが雨を吸い取って、元の形になるような。もう、それくらいの潤いが、俺の中に入り込んでくる。

「ぎししゃっ、ぎししゃしゃっ」

ぷはぁ、この一杯がたまんねえ!

「ぎししゃっ!!」

うるっせえな!

さつきからぎいぎいうるせんだよ！ 誰だてめえは！！

「ぎっ、ぎっ……ぎししゃしゃ……っ」

おれのドリンクタイムの邪魔をする、無粋な輩。

それは、いつかの遺跡平原で会ったあの虫だ。空飛ぶデカイ虫野郎、アルセルタス。

……のだが、今日は少しばかりその出で立ちが違う。

色が違うし、角の形もなんだか――。

「……ぎししゃ？」

……お前、お前！

何だその角は！ 今までのあの一本角はどうした！

「ぎししゃ！！」

あん？ 何のことだが分からない？

ふざけんな！ お前、あの男気はどうしたんだ。一本角に全てを詰

め込むあのロマン……それを捨てちまったのか!?

「……ぎ、ぎししゃ……？」

一本角を、二本角に裂いたその姿。

よりにもよって、お前！ クワガタに魂を売ったのかあ！ あの二

股野郎に!!

「ぎししゃーっ！」

おれの叫びに感化されたかのように、奴は飛び出した。

その忌々しい角を振りかざして、勢いよく襲い掛かってくる。

おれを見る。

このドスヘラクレスの角を見る！

「ぎししゃっ……」

渾身の振り下ろし。

それをもって、奴は右の半身と左の半身をおさらばさせた。

背後の壁に、べちやりとそれが落下する。誇りを失った虫が、埃のように舞っていく。

……全く、自らの誇りを捨てるからこうなるんだ。

お前には、素敵な素敵な一本角があったはずなのに――。

「……ぎししゃっ」

なんて、哀愁漂わせた瞬間だ。

再び、性懲りもなく奴が現れた。あの二股に分かれた角をもった、忌々しい奴が。

「ふしゅー」

砂っぽい色をしたそのアルセルタス。しかし先程俺が斬った奴とは、全く別の個体のようだ。

いや、それよりも。

どしんどしんと現れた、もう一頭の巨大な虫。

アルセルタスよりもさらにでかい、砂色のそいつは、恐ろしいまでに鋭い鋏を、自らの尾につけていた。

こ、こいつあ、ゲネル・セルタスじゃねえか!!

「ふしゅーっ!!」

ここはアタシの縄張りよ!

彼女はそう吠えながら、口から猛烈な湯気を吐き出した。

「ふしゅっ!」

「ぎしゅっ!?!」

かと思えば、その鋏でアルセルタスを捕獲。

驚いてジタバタするのにも構わず、それを自らの口にあてがって。

……?

何をする気だ……?

「ふしゅーっ!!」

そう、おれが首を傾げた瞬間に。

奴はアルセルタスを射出した。まるで猛烈な大砲のように、その二股野郎を撃ち放ったのだった。

「ぎしゅあーっ!!?!」

その超速度から、慌てて身を躲す。

奴の驚愕の声は、どうやら断末魔のようだった。

どちゃっと、背後から嫌な音が響いてくる。柔らかいものが潰れるような、嫌な音。

……恐ろしい奴だ。

このゲネル・セルタス、まさかあいつを砲弾にして放ってくるとは。

憐れ雄、女のためにその命散らす、か……。

……さつきは、酷いこと言つて悪かつたな。

お前は女のために体を張る、立派な奴だったよ。

「ふしゅーっ！」

「お前もアタシの砲弾にしてあげようかしら!？」

なんて、あの女は吠えている。

残念だが、それは願ひ下げだな！

俺はドスヘラクレス。

アルセルタスじゃない。

世界一強いと言われている虫だ！ お前が砲弾になるんだよ!!

「ふしゅっ……!?!」

懐に飛び込んで、自らの誇りを勢いよく振り上げて。

アルセルタスよりさらにでかい砲弾が、このオアシスに弾け飛ぶ。

岩を砕くほどの砲弾を見て、おれは思うのだった。

やっぱり、弾にするならデカイ方がいいもんだぜ、とな。

言われている

おう、暑いぜ。

いやいや、暑すぎるぜ。

ここは砂漠のど真ん中。

あの虫夫婦を軽くのしてから数日後。

おれは未だに、この大砂漠を彷徨っている。

ここはどこだ？

我が愛しの遺跡平原はどこだ？

なんて色々考えるけれど、全く辿り着く気配はない。

ただ、果てない荒野があった。どこまでも埋め尽くす、砂の海があった。

ところどころに、遺跡平原のような不思議な岩がある。いや、これは岩とは呼ばないだろう。ハンターといった、あの二本足の奴らが造った何か。……砦、のようなものだろうか。

砂漠の果てにはオアシスなどなく、ただ捨てられたような建物が広がっていた。

なんとということだ。こんな夜空の下で、おれは本格的に迷ってしまつたみたいだ。

……と、思いきや。

その砦のような何かの向こうで、忙しなく動く影がある。

なんだ？

あの動き、まるで生き物みたいだ。

もっといえば、おれと同族みたいだ。こう、カクカクとした無機質な動き。いや、おれがそういうのも変な話だけれど。

金色の外殻。

紫色に輝く瞳。

大振りな鎌に、不思議な形状をした尻尾。

「きつ……きええええええっ!!」

おれに気付いたそいつは、威嚇するように吠えた。甲高い声で、まくし立てるような言葉を連ねてきやがる。

ちよつとお主！　そこで何をしておるのじゃ!?　ここはわらわの領域、神聖な玉座の御前じゃぞ!?　ええい小虫風情が偉そうに！　去ね！　さっさと去ね!!

……と、息継ぎもなく並べたて、そいつはせえせえと肩を上下させた。かまきりみたいな見た目をしたそいつが、憎々しげにおれを睨んでいる。

なんだこいつ？

金ぴかのかまきりだ。こんな変な奴、初めて見たぞ。

「きい　い　い　い　つー!」

大体なんなんじゃお主は！　何をそうも主役感出しておるのじゃ!?　なんか……こう、コンセプト的にわらわこそ光を当てられるべきではないのか!?

かまきりは、相変わらず意味の分からない言葉を連ねていた。

なんなんだこいつ。詳しいことはよく分からないが、なんだかおれに物凄く敵意を剥き出しにしている。どこか、私怨染みたものを感じるけれど。

おれは、地上最強と言われている。

おれは、世界一強いと言われているドスヘラクレスだ。

この世のどんな虫よりも、どんな生き物より強いと、そう言われているのだ。で、あれば。おれにスポットライトが当たるのも、当然のことじゃないのか？　知らんけど。

「き——!」

どこか鳥っぽい声を上げて、かまきりはキレた。

そうして、その変な尻尾から何かを撃ち出してくる。

……糸？

「きしやああああ!!」

この糸に絡まって死んでおしまい!!

そう叫びながら、かまきりは糸の塊をいくつも放ってきた。

どれもこれも、速度は遅い。避けることなど朝飯前だ。

その一つ一つを翻って避けながら、おれはかまきりへと肉薄。飛翔の勢いを乗せたまま、奴の頭を殴り付けた。

「ぎしっ……い！」

痛いのが!!

かまきりはそう雄叫びを上げ、両手の鎌を振り回す。怒りに身を任せたその斬撃。砂が激しく細切れにされていく。

なんだこいつ。おれの角を喰らっても、死なないだど？ 見た目に反して、中身は岩みてえだ。

「きえええええ!!」

うざつてえ!

振り上げる角で、奴の鎌を弾き返す。そのまま腕ごと吹き飛ばすつもりだったが、結果はせいぜい鎌が欠ける程度。こいつ、結構強いな。

とはいえ、おれからすればそこらの雑魚に変わりない。この、世界一強いと言われているおれの前では。

「ぎしゅっ……い！」

懐に潜り込んだ、おれの強烈なアッパーカット。それを顎に吸い込んで、かまきりは苦しそうに唸り声を上げた。

……うーん、今ので頭全部を吹き飛ばすつもりだったんだが。こいつ、随分と固いらしいな。

「……きつ、きいい………きええええええつ!!」

もう許さぬ!! 徹底的に叩き潰してくれよう!!

それをも耐え切った奴は、憎悪に満ちた声でそう吐き捨てる。

なんでそこまでおれに恨みを抱いているのか分からないが、ここまですごい形相をする奴はそういない。随分と闇が深い女のようにだ。

そんな彼女は、その尻から太い糸を飛ばした。かと思えばそれは見当違いの方向へと飛び、砂の中に落ちる。

一体何がしたいのか。その謎の行動に首を傾げていると——彼女は、突然その糸を繰り出した。繰って、何かを手繰り寄せるようにその背筋を力強く伸ばす。

ずん、と。大地が揺れた。

まるで巨大な野菜が引き抜かれるような、恐ろしい震動がこの大地を包み込んだ。

……一体、なんだ!?

「きああああああ……」

我が玉座をもつて、お主をぺちゃんこにしてやろうぞ……!!

かまきりは、そう笑った。笑って、勢いよく跳躍。糸に引き寄せられるように、あの震動の原因へと飛び込んだ。

砂から顔を出した、ガラクタの塊。ゴミとゴミがくつつき合ったかのようなそれが、ずずずとその全身を露わにする。

そんなゴミの山に、彼女は飛び込んで。かと思えば、金色の糸が大気を駆け巡った。

ぶおおおおん。

鈍い音を立てながら、それは立ち上がる。

かまきりを呑み込んだ巨大なガラクタが、太い脚を露わにして立ち上がった。

えええええええ!!

……なんて、思わず叫びたくなった。おれに声帯があれば、の話だけど。

かまきりは、巨大な何かに変貌した。

いや、何言ってるか分かんないかもしれないけど。でも、何て言うのかな……ガラクタでできた、巨大な竜? 四つ足に、大きな頭みたいなのがついたそれは、まるで竜のような何かだ。

「きよええええええええっ!!」

こいつでお主を叩き潰してやるわー!

そう、かまきりが吠えて。かと思えば、その太い太い脚がおれへと振り下ろされる。

瞬間、視界が全て砂色に埋まった。勢いよく踏み潰されて、地面の中へと押し込まれたのだ。

あー。なんか、凄い奴が出てきたなあ。

おれはドスヘラクレスだ。

世界一強いと言われている、地上最強の存在だ。

そんなおれに向けて、彼女はここまで全力で立ち向かってくれている。こんな、巨大兵器まで持ち出して、おれを倒そうと奮戦している。

……なら、おれもそれに応えるっていうのが、礼儀の一つもんだよな。

「きよあああああ——!!」

甲高い高笑いを上げているかまきり。

そんなかまきりが操る、巨大なゴミの塊。

ゴミの、おれを踏み付けるその脚の裏に。

そつと、自らの角を振り上げた。

「——ああああきええええっ!!?」

どかんと、やけに景気の良い音が響く。

その一瞬でゴミの山は砕け散り、全てが零れ落ちる瓦礫へと変貌した。おそらくそれを操っていたであろう金の糸は激しく引き千切れ、その衝撃で中央の繭のようなものが爆散。

崩壊する衝撃に乗って、かまきりは大きく打ち出された。まるでパチンコのように、その金の光は砂漠の空へと溶けていく。

「きいあああああ!!」

何で「わらわはかまきり」、じゃないのじゃー!!

なんていう、よく分からない捨て台詞を吐いて。

そのかまきりは、夜空の星に仲間入り。

本当に、よく分からん奴だ。

わらわはかまきり？

なんだそのぱつとしない感じ。

——おれはドスヘラクレス。

世界一強いと言われている、地上最強の虫だ。

おれこそが、ナンバーワンだ!

虫だ。

おう、熱いぜ。

おれは今日も元気だぜ。

一寸の虫にも五分の魂。そんな言葉が、最近のお気に入り。ドスヘラクレスだ。

おれは虫だ。

フィールドの端で、ひっそりと暮らす虫。

空を自由に飛び回る飛竜とか、海を気ままに泳ぐ海竜とか。はたまた悠久の時間を生きる古龍だとか、そんな大層なものじゃない。

おれはただの虫だ。

ちよびつとばかり強いだけの、虫なんだ。

けれど、たかが虫だつてなめちやあいけない。

おれはドスヘラクレス。

世界一強いと言われている虫だ。

一寸の虫にも五分の魂つて言葉通り、こんな小さいおれだけど、すげえ力があるんだぜ。

アルセルタスだろうが、ゲネル・セルタスだろうが。

ネルスキュラだろうが、あのよく分からないカマキリであろうが。

おれにとつては、どいつもこいつも敵じゃない。あんな奴ら、例え東になってかかってこようとも、まるで相手にならないぜ。

……だけど、だけどな。

こんなおれにも、一つだけ弱点があるんだ。

「……お、虫取りスポット発見」

不意に、そんな声が響いた。

モンスター特有の、とにかく吠えるような声じゃない。人間特有の、言葉を音として露わした独特の響きだった。

「……マボロシチョウ、マボロシチョウはいないかね！」

おれには、彼らが何て言っているかはまるで理解できないのだが。

それでも、どうしても敵わないのだ。こうなってしまうと、おれはどうしても勝つことができないのだ。

ハンターに？

いやいやいや。あんな人間、角一振りで粉々にできるぜ。

問題は、あれだ。

あいつが構える、あの網だ。

虫あみ。しかも最高級の、虫あみグレート。

あれの寝心地の良さは、半端じゃない。アレに掬い取られると、まるで天にも昇るような気持ちになってしまう。あの柔らかさと弾力性を伴った極上の感触を前に、つつい吸い込まれてしまうのだ。

こんなに柔らかくて、寝心地がよくて、まるで極楽のような感覚。とてもじゃないが引き千切るなんてことできそうにない。

もちろんな？

もちろんおれは、世界一強いと言われている虫だぜ。

どんな奴だつて敵いつこない、地上最強の存在だぜ。

……しかしな。

こんなおれだつて、甘つたれたい時もあるんだ。

そんな時は、つついこんな魅力的なところに飛び込んじまっとなあ。
照れるぜ。

「……お、何かかかったぞ」

飛びついた網。

おれを抱き止めてくれる優しい感触。

ふかふかで、もちもちで。温かくて、涼しくて。

なんかもう快適過ぎて、とろけてしまいそうだ。

本当に、これにだけは抗えない。悔しいが、完敗だ。

「……つち、なんだよドスヘラクレスかよ……。こいつ取れてもどうしようもないんだよなあ……」

「――残念だな旦那。マボロシチヨウ、手に入っていないんだろ？」

それじゃ防具は作れないぜ」

「そりゃないぜ、一日中虫取りに費やしたんだぜ……」

ギザミXシリーズを作ってもらいたい。

そんな思いの下、とあるハンターが加工屋に訪れていた。

しかし加工屋の主は、彼を適当にあしらっている。曰く、素材が足りないのだとか。

「なあ、こいつで代用できないのか」

「あん？」

「ドスヘラクレスだ！ 世界一強いと言われてる虫なんだぜ!？」

「馬鹿かあ！ こんなんが世界一強かったら、加工屋業界がとつくに全滅しとるわー!」

「うぐつ……いやいやいや！ こいつの実力はきつと閣蝟螂だつて一捻り——」

「冗談はその身なりだけにしとけ！ 妄想も大概になあ!」

世界一強いと言われている。

世界一強い——と、言われている。

——世界一強いとは、言っていない。

「なあなあ、腰のワンポイントに使うんだろ？ ほらこいつの甲殻、これならどんな衝撃も——」

「帰れエ！ そんな汚らしい甲殻使つて、なあにがワンポイントじゃ!」

「アンタが言い出したことやろがい!」

「ああん!? やんのか双剣厨が!」

「わしやガンナーじゃボケエ!!」



おう、寒いぜ。

でもおれは元気だぜ。

この雪の光を浴びて輝く体。

寒さに負けずに聳え立つ大樹のような角。

どきどきするほど、決まってるぜ。